

## 活動報告「五日市憲法の町」歴史と文化探訪

記 2022年10月8日

会員 小川 雅愛

- ・実施日 2022年（令和4年）10月6日（木）8：10～15：40
- ・参加者 22名
- ・案内 現地ガイド 9：30～11：30

## ◆計画実施にあたって

この企画はコロナ禍の始まる前2019年に計画されていて、当初は五日市憲法のゆかりの地で憲法草案関係の場所を訪ねることを考えていた。コロナ禍の中止・延期が2年続き、憲法ゆかりの地巡りを主眼としつつもそのバックボーンとなる町の歴史と文化まで領域を広げ、3年越しの今回の実施とした。

サークルでは明治大学文学部名誉教授渡辺隆喜先生の講座、また現市文化財保護課の木村立彦氏の講義を毎年お聞きし、学びとともにたのしみとしてきた。

その講座や講義の中でも印象に残ったのが、渡辺先生の明治10年代の全国・埼玉県の地方民会や自由民権運動に関するものであった。その中で五日市憲法の特色をまとめられ、当時、民間でこれほどのものをまとめられたのは脅威、地域の人々の先進性と一般性の検討が必要。所沢地域も可能性を秘めた地域と締めくくられた。

木村氏の講義では所沢の地誌を江戸時代に記した斎藤鶴磯の「武藏野話」で、野老澤の地名は江戸時代にはこの書以外にはないこと（それ以前は室町時代の僧道興准后著「廻国雑記」にみられる）、それに関連して、天保の飢饉の際、五日市付近の窮民を救った山野に自生する野老に関する「ところ芋の碑」が文化財として五日市の光厳寺にあること、またほかの講義で所沢の寺院は多摩地域の寺院の影響をうけてきたことを述べられた。

以上のことから五日市憲法草案のことを調べるだけでなく、町の文化と歴史探訪に拡げた理由もある。

## ◆実施の報告

1. 行程・順路（西武所沢駅を8時23分—武藏五日市駅9時22分着）
  - ・駅—勧能学校（学舎）見学—五日市広場—檜原街道沿い明治時代の著名人住居—五日市憲法の碑—萩原タケ胸像—郷土館見学—昼食—（雨が断続、降りやまず早期解散）希望者のみ11名 光厳寺見学—駅
  - ・ガイドは駅から五日市郷土館内解説・研修室まで

## 2. 五日市の発展

五日市は西に甲武山地が迫り、多摩川に合流する秋川などの中小河川が貫流し、風光明媚な秋川渓谷などがあり現在訪れる人も多い。深い渓谷の台地上のところに街が開け、台地にあるため、所沢と同じく古くは井戸からの水くみは重労働であった。秋川地区では古代から牧が開拓され、戦国期は武藏七党の西党の武士が活躍する地であった。

戦国時代、檜原の炭を五日市の町で取引したのが町の発展の第一歩で、江戸時代には30軒の独占販売権を持つ薪炭商、また、江戸での需要が高い木材商、黒八丈などの絹織物の機織り農家など豪商や豪農層がかなり多く、市場として栄えていた。明治に入ると薪炭の自由競争となり豪商は減ったようだが、半商半農の家が街並みを形成していた。明治期は横浜との生糸の取引が八王子の商人を介して盛んになり、養蚕で利益をえる裕福な商人が出現した。以下、見たり聞いたりした箇所を中心に断片的ながらまとめてみる。

### 3. 勸能学校

明治5年学制頒布とともに五日市の公立学校として開校、現在は太子堂のみが建っているだけで、とても学校があったように思えない。寺子屋の延長のような感じと思えるが、スペース的には当時は今より広い場所にあったという。子供は120名ぐらい在校した。ここは五日市憲法草案を起草した千葉卓三郎が1880年、28歳で五日市のここに教師として着任したことがすべての始まりであり、重要な史跡といえる。

卓三郎が11歳で郷里の宮城県で師事した儒学者の大槻磐溪、その後宮城県内や上京した都内各所での多種類の勉学や商業・宣教師の手伝いなど諸々の遍歴をへているが、同じ仙台藩士の出で、同じ師の磐溪に学び、戊辰戦争も同じ敗戦を経験した15歳上の当学校の初代校長の永沼織之丞の誘いがあったからだろうと推察できる。ほかの教師も宮城出身者が4,5名いたことからも確かだろう。その間、若き地域のリーダー深沢権八や町の有力者が結成した自由民権運動の政治結社「学芸講談会」の理論的リーダーとなり、講談会で民衆の意見を取り入れつつ、草案を書き上げる。

その後体調を崩し、また、教師の政治活動禁止に嫌気し学校をやめ、東大和の鎌田屋本家に隠棲する。その後、再び永沼校長の後任、第2代校長として勸能学校に3年間奉職するが、ますます病状は悪化して31歳で亡くなる。

小田急電鉄を創立した利光鶴松氏も時代はほぼ同じにここに教師として勤められた。自由民権運動のさまざまな経験を教師時代にしたからこそその他の自由党員、国会議員、経営者としての成功があったとする旨述べた記念誌がある。ここにはあとで見学する萩原タケが家庭の都合で3年間のみ通ったことが知られている。この学校は明治18年ごろに現在の五日市小学校に移管された。勸能学校にあった建物の一部が現小学校に使われているという。



### 4. 五日市広場（市神様）

檜原街道を西に進むと小さな広場があった。先に述べた市がいつ開かれたか定かではないが五日市の発展のもととなつた5の付く日に開かれた市、そのことを示す記念石が置かれ、市神さまとしてあがめられているという。毎月5の付く日の月三回の市、のちには10の日が加えられ六斎市となった。マイクなしであったのでガイドさんの説明が聞き取りにくい。聞き違いがあるかもしれない。五日市村は1879年（明治12年）五日市町になる。当時、東京府の渋谷は村であり五日市はかなり早くから町ができ、繁盛していたことを示している。ちなみに所沢村は2年遅い1881年（明治14年）に所沢町となった。



## 5. 檜原街道沿い明治時代の著名人住居

街道をさらに西に進みながら、自由民権運動の政治結社「学芸講談会」のメンバーであり、私擬憲法の五日市憲法草案に関する五日市の人たち（町の顔役）が現在はその痕跡はないがどこに住んでいたのかをガイドさんに道々案内していただいた。おもな人物は町長の馬場勘左衛門宅、質屋の内山安兵衛宅—豪農であり黒八丈の専売権をもった大地主、五日市のNo.1、所沢でいえば時代は違うが向山小平次のような財力を持った人、武州一揆の際、農民兵の銃を自己資金ですべて調達したことが知られている。県会議員の土屋勘兵衛、この人が五日市憲法の草案の書式・様式の参考にした嚙鳴社版草案を嚙鳴社八王子支社から入手したことが重要、これがなかったら草案はできなかつたという。今回は覗けなかつたが、卓三郎が下宿していた鎌田屋がある路地、萩原タケの生まれたところなど、街道沿いの狭い範囲に重要な人々が住み、まとまっていたと感じる。自由民権の町として上層部から民衆まで思想的に徹底しており、自由民権に理解のない部外者は入り込めないような趣しさえあつたといふ。

## 6. 五日市憲法の碑

五日市憲法草案の6つの代表的な草案を碑文として刻んである。五日市中学校の校庭の門内にあるが、門は開けて自由にみられるので、全員門内でこの碑の解説を聞く。

204条の条文のうち「基本的人権の保護」「法律上において平等の権利」「身体・生命・財産・名譽を保有する権利」を定めた3つの条文を含め6つである。

五日市憲法草案の碑はここ五日市とともに、同時に2か所に石碑が設けられた。千葉卓三郎の生誕地宮城県栗原市志波姫と仙台市の卓三郎が埋葬された寺に設置された。なお志波姫は五日市と姉妹都市となっている。



## 7. 萩原タケ胸像を見る。

埼玉県では日本初の女医荻野吟子は多くの人が知っている。吟子は埼玉県初の民権結社七名社の代表人物でもある。経歴その他遜色ないが意外と知られていない萩原タケ。

ここ五日市の誇りであり、初めて設けられたナイチンゲール記章の世界初の受章者で、日赤の看護一筋で監督トップに昇り詰め、日本看護協会を設立した萩原タケの洋装胸像を見る。山間の経済的にも恵まれない環境に育ち、華族制度、社会風潮の困難を乗り越える辛抱強さ、両親や兄弟への終生変わらぬ愛情、看護への献身の人であり、五日市の環境がはぐくんだ偉人といえる。



## 8. 五日市郷土館

今回 郷土館さんには大変お世話になった。研修室の使用を認可いただき、短時間であるが研修室での意見交換などに活用させていただきありがとうございました。玄関に掲げてある地図で町の説明があった。三ヶ島葭子は五日市の小宮尋常高等小学校で数年間、教師として勤務、この頃与謝野晶子との交流があったようだが、五日市ゆかりの人として地区の徳雲院に歌碑が建てられ大切にされている。展示室では憲法草案や萩原タケの解説をガイドの方から伺う。全般的に時間不足で、十分に理解するまでとどまることができなかつた感がある。こうした展示は調べる度合いによっていくらでも時間は必要。憲法草案の写しと書き下し文の対比であるが、現行憲法と比べても詳細で分量の多さは驚くばかりである。五日市憲法草案展示コーナーには「展示解説」パンフレットがあり理解しやすい。ガイドの方とここで質問とか自由民権運動の意見交換など企図したが時間がとれなかつた。また機会があったら訪問したい施設である。





## 9. 光厳寺

希望者 11 名で向かう。バスに乗り 5 分以内で目的の戸倉に着く。戸倉山城跡のある頂上は靄がかかっている。歩くとバス停より健脚の人で 10 分というが、途中から急傾斜の道路が約 150~200 メートル位続く。昔の人はいかに足が強かったか感心する。歩めども遅々として進まず、ようやく平坦な門前にたどり着く。

臨済宗建長寺派寺院。足利尊氏の命で開山、おそらく北朝の初代光厳天皇のお名前をいただいたのであろう「こうごんじ」が寺名となっている。4 代後光厳天皇の扁額があることが示されていた。その後は後北条氏が関係し、北条氏照が焼失後の当寺を再建したとい。五日市の寺は廣徳寺・開光院ともに臨済宗、後北条氏が深く関わっているとみられる。

ところ芋の碑は、天保の飢饉の際に非常食となったところ芋、窮民の山への立ち入りを許可し、窮状を救った名主の徳をたたえ、当寺の住職がそれを顕彰した碑文を記したものである。



### ◆個人的感想

天気が良かったら廣徳寺・開光院にも足を延ばしたかったが、小雨が止まないので、雨に濡れることの少ないバス移動のできる光厳寺のみとした。秋の深まりとともに寺院や神社散策はさらによくなるだろう。

五日市憲法草案のことはかなり昔から知っていたが、認識は浅かった。数年前、武州一揆の会の企画で五日市憲法草案発見者の元専修大学教授新井勝紘先生と深沢家の蔵立ち入り見学、五日市憲法の碑解説聴取、五日市郷土館研修室でのレクチャーを経験した。

当サークルの計画の2019年の事前実踏、今回の計画では予想外の参加者だったので、念入りに2回の実踏を行った。実施と合わせ五日市には5回も足を運んだことになる。何回も行くうちに歴史の謎解きの面白さも少しづかってきて、歴史を紐解くとはこんなことなのかと感じる。

日本の政治風土はかつて「事なかり主義」「長い物にはまかれろ」といわれるよう市民レベルの意識の低調なことが指摘されたことがあり、しかも欧米では基本的人権の長い獲得の歴史をへて権利意識が高いが、日本にはそうした経緯がないので権利に淡泊であるかの論もあったように記憶している。明治10年代の自由民権運動の下からの改革のエネルギーのすごさを五日市憲法草案に関する活動を通して感じ始めている。

以上

担当幹事

E グループ 小川雅愛 田口靖 担当協力 佐野喜代子

写真提供 小倉洋一

◆主な参考文献

- ① 2020年（令和2）11月歴史をたのしむ会 講座資料  
「自由民権運動と五日市憲法」講座 明治大学文学部名誉教授 渡辺隆喜先生
- ② 2014年（平成26）1月 野老澤の歴史をたのしむ会例会資料  
「『武蔵野話』と斎藤鶴囃」 講義 木村立彦講師
- ③ 「五日市憲法」 岩波新書 2018年刊 新井勝弘著
- ④ 「五日市憲法草案をつくった男・千葉卓三郎」くもん出版  
伊藤始 杉田秀子 望月武人著
- ⑤ 「国道16号線」—日本を創った道 新潮社 柳瀬博一著
- ⑥ 「献身 萩原タケの生涯」白水社 森 禮子著
- ⑦ 五日市郷土館資料 「五日市憲法草案展示コーナー 展示解説」
- ⑧ 「三ヶ島葭子 歌碑除幕式」資料 2009年（平成21）三ヶ島葭子の歌碑を建てる会、ほかネット情報